

トップが綴る 人生感動の瞬間

——心がふるえた出会い

PHP研究所 [編]

感動をいただいたバスの運転手さん

丸吉日新堂印刷(株)

社長

阿部晋也

この話は、弊社の新入社員A君が体験した感動ストーリーから始まりました。

彼は二年前、通学のためいつもの路線バスに乗りましたが、財布を忘れてしまったことに気づき、バスを降りる際に正直に運転手さんにお詫びしました。そうすると運転手さんが、「わかりました。では料金は今度乗るときでいいですよ」と言ってくれたそうです。そして彼が「ごめんなさい、次回必ずバス代をお支払いさせていただきます！」と言ってバスから降りようとしたとき、運転手さんが「ちょっと待ちなさい！」。振り向くと、「君、バス代はいいけど今日一日どうするんだい？」と言って、自分の財布から千円札を二枚取り出し、見ず知らずのA君に手渡そうとしたのです。A君はとっさに、「それは受け取れません！」と丁重にお断りしましたが、「いいから遠慮せず持っていきなさい」と言って渡されたそうなのです。しかも、とくに名前や住所を聞くわけでもなく……。

つまり貸すつもりではなく、完全に与え切りの個人的なお金なのです。見ず知らずの青年に対し、まったく見返りを求めず、そんな行動ができることに、私は心から感動しました。はたして自分がその運転手さんだったらどう行動していたか？ 千円札を二枚じゃなくて、一枚かな？ なんて心が小さいことを考えてしまいました。後日A君は菓子折りを持ってお礼に行ったそうですが、そのとき中西さんというその運転手さんは乗務中で、お会いできなかったとのことでした。二年経っていました。私からもあらためてその運転手さんに感謝の気持ちを伝えたくなり、当時の情報を頼りに電話で探し出し、ようやくそれらしき人を見つけ、私とA君の二人で会いに行きました。

お会いした中西さんは「いい人」がにじみ出ていました。お聞きすると、マニュアルで決められた行動などではなく、中西さんが個人的にされていることで、ほかにも同じような例がたくさんあり、いつも営業所に感謝の言葉が寄せられているとのことでした。同僚やお客様からの信頼の厚い、みんなの見本になっておられる方だそうです。

たった一人、中西さんという運転手さんの行動で、私は一気にそのバス会社のファンになっただけでなく、A君も、仕事をおして人を感動させることができることを知り、私もあらためて人との出会いが人生を変えることを実感しました。